

やまなし
医療最前線
がん治療の今
県立中央病院から

〈229〉



加々美桂子医師

医師は「働き盛りや子育て中の患者も多いがん。ロボットの導入で入院日数の大幅な削減につながっている」と話す。

子宮がんには、子宮本体の内膜

山梨県立中央病院は婦人科のロボット手術では全国トップクラスの実績があり、子宮体がん患者に對しても、体への負担が軽いロボット手術を積極的に実施している。同院婦人科医長の加々美桂子

山梨県立中央病院婦人科
腹式手術の推移



ロボット手術で体への負担減
子宮体がん入院も短期に

にできる子宮体がんも、入り口付近の子宮頸がんがある。検診の充実によりがんになる手前での発見が増えている子宮頸がんに比べて、子宮体がんは不正出血をきっかけに受診して見つかることが多い。

子宮体がんは初期でまだ妊娠を希望している場合はホルモン療法を行えることもあるが、基本は子宮の摘出手術となる。以前は開腹して行うことが一般的だったが、

に婦人科で導入して以降、手術件数は伸び続け20年は165件。国内でも有数の施設となっており、他県から手術の見学に訪れる医師も増えている。

医療技術の進歩により、近年は傷口が小さくて済む支援ロボット「ダヴィンチ」や腹腔鏡を採用するようになってきた。手術方式の変更は傷痕が目立たなくなるといふ効果にとどまらな。開腹では手術による出血量も多く2週間程度の入院が必要だが、ロボットや腹腔鏡は体への負担が少なく3〜4日程度で退院できるといふ。

ロボット手術は厚生労働省の規定を満たした施設で行うことができる。同院では2016年

◇ 日進月歩で進化を続ける医療の世界において、がん治療も決して例外ではない。最新の動きを県立中央病院の現場からレポートする。

第2、4木曜日に掲載します